

鳥海改ニ
コスプレして
女にカロー
ってる

笹松しいたけ

イラスト ゆなまる

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

コスプレ女に 沼ってる

笹松しいたけ



新スクの淵から

遠くへ行きたかった。

人生の意味を見失い、国際的な大イベントもコミケもない数年を過ごしているうちに、生きていく活力すらを失いかけていた。

鳥海改二コスのコスプレイヤー、アイリスが、射精したばかりのまだ硬いペニスにぐちぐちと跨がる。既に愛液でべとべとになった膣口を押し付けられるように腰を落とす。

ぬるり、体重と体温がペニスに伝わる。熱い。

「司令官さん、私のおっぱい、気持ちよかったですか？ えへへ、いっっぱい出ましたね。

嬉しい……♡」

そう言いながら、衣装を着たままパイズリで出させた精液が、胸の間にべつとりと付着した様子を見せつける。柔らかく大きな乳房で絞り取られるように飛び出した、濃く、指で摘めるほどの精液は、アイリスの頬やメガネのレンズにまで飛び散っている。

メガネのレンズの向こうには、真っ赤なカラーコンタクトの入ったきれいな瞳がある。その瞳がふたつ、じっと、おれの目を射抜くように見つめる。

もぞもぞと、アイリスが腰に体重をかけて、ぬるぬると愛液をペニスに塗りつけるように動く。ふとももに引っかけた黒いショーツのクロッチは、既にアイリスの愛液が布地

に吸いきれないほどべっとり付着し、きらきらと光っている。

着たままのパイズリで大きく着崩れた衣装と身体の隙間から、ぷるぷると美味しそうな乳首が、鮮やかなピンク色の乳輪が、精液でべとべとの谷間が、全てがエロく、本当に二次元の「鳥海改二」にパイズリされたかのように見えて興奮する。

「スカート……めくって、なか、みせて」

「……へんたい♡」

そう言いつつ、アイリスがスカートの裾すそを両手でそっと掴み、するりと静かに持ち上げる。比較的ナチュラルに生え揃った黒い陰毛のデルタゾーンが、愛液まみれのアイリスの女性器が、パイズリで射精したのち、アイリスの膣口で抜かれて残り汁をだらだと垂れ流しているおれのペニスに体重を掛けているところが、あらわになった。

「おいおい、そんなにナマで擦りつけてたら妊娠しちゃうぞ……」

精液まみれのペニスを無防備に膣口に押し付ける形になっていることを嗜めるように言う。

一昨年、様々な偶然から、人妻コスプレイヤー「みーこ」に、衣笠改ニコスプレをしてもらって、ナマで性器を挿入し、「精子提供」をしていたおれが、どうしていま、別の女性——鳥海改ニコスをしている「アイリス」とこういうことになっているかというと——

§

延期された東京開催の大スポーツイベントも無事に終わり、件の新型感染症——COVID19——のワクチンも、ひとまず二回は行き渡った頃、ようやく、待ちに待った、コミックマーケットの再開が予定された。GoToトラベルキャンペーンは中止されたままであったり、感染拡大状況に依じて突然催し物が中止になったりと、一進一退の様相を呈してはいたが、ひとまず、ようやく、少しずつ、日焼けの跡がさめていくように、じわじわと、止まっていた世界が動き始めたように思う。

二年ぶりに開催された冬のコミックマーケットは、以前のような、人を人で洗うような混雑とは無縁ながら、そして、一人ひとりの同人作家が、作れる範囲で本を持ち寄る、どこか牧歌的な、それでいて不思議な光景だった。

一年半前、ずっと好きだった、衣笠のコスプレをしていた、既婚女性コスプレイヤー「みーこ」との、精子提供という言葉で包んだ生セックスありのコスプレ撮影旅行の後、無事に彼女は妊娠し、おれ——カメラマン「ホクサイ」——は、みーこからの連絡が予定通り途絶え、無性に空虚な気持ちになった。自棄酒やけざけに溺れ、仕事も疎かになった。自分の気持ちかが分からなかった。

自分は、養育費を負担することなく、子育てに関わる膨大な時間リソースや名もなき家事を不当に、ずるく逃れて、配偶者が無精子症だという既婚コスプレイヤー「みーこ」の子宮に精液を吐き出し、受精させ……無責任に中出しセックスをして、合意があったとはいえ……俗な言い方をすれば托卵で、もともと自分の中で抱えているオスの価値観からすれば、勝ち組で、得でしかなかった。

なのに、日々大きくなっているであろう「みーこ」のお腹を想像し、夢にまで出てきて——そのときの彼女は決まって衣笠改ニコスプレで——そしてその度に喉がカラカラに乾いて、全身汗びっしょりで飛び起き、深酒を後悔しながら、今日も冷蔵庫から飲み物を取り出し、グラスに注ぐのも惜しんでがぶがぶと飲み干した。

「みーこさん、なんで……」

深夜三時の静かなワンルームで、頬から顎へと、つうと脂汗を滴らせ、自らの心のなかでの整理のつかなささ苛立ってしまった。

おれは、いつたい、どうしてしまったのだろう。

寒いせいか、ふと、雪が見たくなった。「みーこ」と関西を旅行しながら、ポートレートの撮影や、衣笠改ニコスプレの撮影をしたのは真夏だった。あの暑さを忘れるためには、

冬の、雪の降る街を歩いてみたかった。

折しも、新幹線開業何周年だか記念ということもあり、二月の東北新幹線がポイントで安く乗れるという。まだ通勤していた頃、通勤定期を買ったときに貰ったポイントがいくらか、そのまま手つかずになって貯まっていた。

気がつくと、目的もなく青森を訪れる予定を立てていた。

「来月青森に行く、目的はこれから」

そうツイッターに投稿し、新幹線とホテルの予約をした。そのまま青森で一泊し、函館に抜けてから札幌へ行こうとプランを立てる。ついなので、札幌の友人にも声をかけてみる。

駅前の食堂で名物を食べられたら良いな、ホタテが美味しいらしいが、と思っているとスマホが軽く震え、リプライが届いている通知が出る。

「青森来られるんですか？ 寒いのでお気をつけて、楽しんでいってくださいね」

どうやら青森に住んでいるらしい、フォローしていたコスプレイヤーの「アイリス」さんからのリプライだった。ありがとうございます、と返しつつ、アイリスの投稿していた画像を遡る。艦これのコスプレをしていた……のは、どうやら件の感染症が流行する前の、十九年の暮れまでのようだった。しかし、大淀や明石、陸奥といった、長身を活かしそ

のコスプレ写真はとても魅力的だった。何度かコミケの会場で見かけたこともあったはずで、思いもよらぬ人からのリプライが嬉しかった。

しばらくすると、封書のアイコンが光った。アイリスからだった。

「ホクサイさん、いま青森に来るって正気ですか、観光にしてもあんまりおすすめはしません」

心から身を案ずるような文面だった。率直に返す。

「いやー、ちよつとここ数年色々あって、雪が見たくて。そのまま北海道に渡って行こうかなと思うんで、青森は一泊の予定なんです。駅前の食堂でホタテでも食べようかなと」

「あ、あそこの食堂ですね、旅行ガイドブックでも有名で……混んでるとバタバタしますが、親切でおいしいです。あそこならおすすめです」

そんな感じで数通やりとりをして、冬でも楽しめる駅に近い店を数軒教えてもらった。

数日が経ち、旅行の予定を入れてみると、幾分いくぶんか心が軽くなってきて、どん底だった気持ちも上向いてきた。

死んでいた性欲も戻りつつあり、素人コスプレハメ撮りを買ってみたいして、その作品

の生々しい部分を楽しむ余裕も出てきた。ウィッグと陰毛の色が揃っていないところが生々しくてよい。ピンク髪のキャラなのに、バッチリウィッグまでキメているのに、整えられた黒い陰毛がモザイク越しに映っていることに興奮した。

「あー、コスプレエロ自撮りが見てえ」

などとツイッターに投稿する余裕も出てきた。すぐにお気に入りに入れられたという通知が出た。一人はみーこだった。育児で忙しいようでコスプレをする余裕はなさそうだけれど、手持ち無沙汰になったのだろう。あまりポジティブな投稿ができなかったせいか、心配をかけてしまっただろうか。

……もう一人はアイリスだった。アイリスのプロフィール画面からメディア欄に移り、遡ってコスプレ写真を眺める。いつのイベントだろうか、明石コスの写真を眺めながら、良からぬ妄想をする。

『修理、しちゃいますね……♡』

とかなんとか言いながら、おれの股間にむしゃぶりつく——などと、ほぼ面識のないコスプレヤーの健全写真を勝手にオカズにしようとしたところで、アイリスからDMが届いた。盗聴器でも付いているのか？ そうじゃないといいなあ……と思いつながら開いた。

『あの、ホクサイさん、えっちな自撮り、コスプレしてなくて恐縮なんですけど、その、